

私が好きな

この一本、一冊、一枚。



『ベン・シャーン ある絵の伝記』

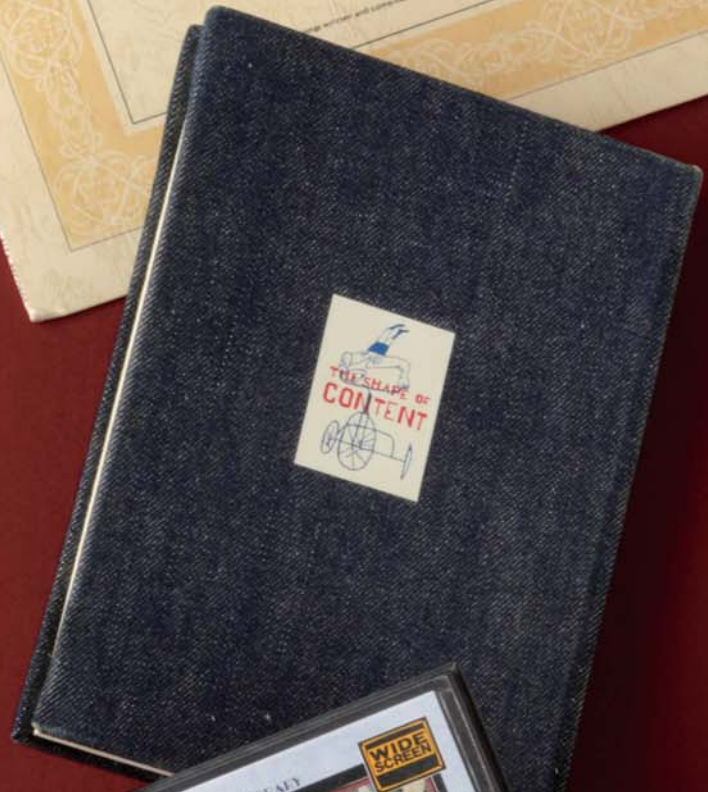
アメリカ現代画家として日本でも広く知られたベン・シャーンの美術・芸術観に触れる一冊。

ベン・シャーン／著
佐藤明／訳



『荒井由実／ひこうき雲』
荒井由実 の1stアルバム。後に夫となる松任谷正隆や細野晴臣もバックメンバーとして参加している。2000年にはLPのブックレットを復刻したりマスタリングCDも発売されており、今なおファンの間で強い人気を誇る作品。

1973年発売



『チャイナタウン』

元警官で今はやり手の私立探偵ジェイクは離婚専科。今度の依頼も浮気調査だったが、クライアントが実は偽者だったことから事件に巻き込まれる。次々と奇妙な殺人が起こり、やがて脅しの手が忍び寄る。

1974年公開・アメリカ
発売元:CIC・ビクタービデオ株式会社



この一本 ▶▶▶▶▶ 『チャイナタウン』



本城誠二さん
1952年生まれ、札幌市出身。北海学園大学人文学部教授。映画と音楽、テラの後のビルをこよく愛す。

私立探偵ジェイクが暴く
運命の街LAに潜む疑惑の謎。
俳優もスタッフも一流揃いの名作。

舞台は1930年代のロサンゼルス。大恐慌時代の水をめぐる利権が殺人事件を呼び、その黒幕はロスを牛耳る実業家ノア・クロス。この悪役を名監督のジョン・ヒューストンが悠々とかつ憎々しげに演じます。その娘イヴリン・モレーイをフエイ・ダナウェイ。そして事件を探る私立探偵ジェイク・ギテスはジャック・ニコルソンがふてぶてしくも、一抹の純情を残す演技で。「チャイナタウン」はジェイクが警官だった時のパトリール区域で、ある種の治外法権というか、権力も人の情も及ばない運命の左右する、虚無的な場として描かれます。そのチャイナタウンでジェイクはイヴリンを逃がそうとするけれど、刑事によって誤殺されてしまいます。鳴り続ける車のホーンとイヴリンの娘の泣き声、そこにかぶさるように流れるジェリー・ゴルドスミスの音楽がなんとも良いです。そしてジェイクの元同僚であるエスコバー警部補が「ここはチャイナタウンだから」と彼を諭すように言う。監督のロマン・ポランスキー自身も数奇な運命に翻弄された経歴を持っていますが、思わず重ねて見てしまいます。製作がロバート・エバンス、脚本がロバート・タウン（アカデミー脚本賞）、すべてにおいて一流のメンバーが作ったフィルム・ノワールの名作ですね。

この一枚 ▶▶▶▶▶ 『荒井由実／ひこうき雲』



石崎 岳さん
1955年、旭川市生まれ。北海学園大学特任教授。HBCテレビ6のキャスターを経て衆議院議員も3期務める。

輝くようなメロディが衝撃的だった。
私にとつてのユーミンは今も、
デビュー当時の「荒井由実」のまま。

小学校3年生からビートルズにはまり、それ以来CSN&Y、ジームス・テイラー、ザ・バンドなど洋楽ロック一辺倒だった私の前に彗星のごとく現れたのが、デビューしたばかりの荒井由実でした。大学受験に敗れて浪人していた頃、入り浸っていた「唯我独尊」という喫茶店でのデビュー・アルバムを聴き、衝撃を受けたのを覚えています。彼女はまだ19歳でしたが、作曲りのセンスが素晴らしく、日本人でこんなに素晴らしい曲を作るアーティストが出てきたなんてと驚愕でした。輝くようなメロディに彼女の歌声がびったりとはまり、詩には若い女性の気持ちさが素直に現れている。中でも一番好きなのが1曲目の「ひこうき雲」で、イントロを聴くだけで、一瞬で彼女の世界に引き込まれます。喫茶店に行く度にこのアルバムをかけてもらい、彼女の歌声に浸ることが、浪人中だった私の唯一の楽しみであり、救いでもありました。それから20年の歳月が経ち、94年にご本人にお会いする機会に恵まれました。このレコードの裏面にサインを貰った時は感無量。デビュー当時のファンであることを伝えると、嬉しそうに笑ってくれました。ユーミンは今年でデビュー40周年ですが、私にとって彼女は永遠に、デビュー当時の頃の「荒井由実」のままなのです。

この一冊 ▶▶▶▶▶ 『ベン・シャーン ある絵の伝記』



中江潤一さん
1950年生まれ、道南出身。イラストレーション中江事務所代表。イラストレーターとして数多くの広告作品を手がける。

アメリカ現代美術に強く惹かれた冊
ベン・シャーンは今でも尊敬する一人
芸術・美術を志す人には知って欲しい。

この本をはじめて手に取ったのは1972年頃のことです。当時はまだ今の仕事（イラストレーター）に就く前でした。ベン・シャーンといえば日本のグラフィックデザイン界に強い影響を及ぼし、我が国でももっとも親しまれたアメリカ現代美術のグレートネームズのひとりですが、多数収録されている作品のほか彼の思いも詰まったこの内容の濃い一冊からは、どう作品に向かい合うべきか？ を教わったような気がします。描くことへの「葛藤と幸福」や「適切な概念を与えること」……と、今になって思い返すと当時はそんな事ばかり考えていられた幸福な時代でした（笑）。「ラッキードラゴン」シリーズ（第五福竜丸事件がモチーフ）や「サッコ・ヴァンゼッティ」シリーズといった作品を知り、やがてこのようなそれまで知らなかった社会派と呼ばれる作風に強く興味を持つきっかけにもなりました。また泰西名画よりも、アメリカ現代美術に強く惹かれるようになったのもこの本に出合ったからと言っても過言ではないでしょう。ベン・シャーンは今でも自分のスタンダードです。し、心から尊敬するアーティストの一人です。彼を知らない今の若い世代の人、それにちよつと古い言い方ですが（画学生）を志す人にもぜひ読んでみらいたい本ですね。

